

風疹

原因

風疹ウイルスが口や鼻から入って発病します。

潜伏期間

約 2 週間（数年おきに流行します。）

症状

病状は年齢によって異なります。乳幼児では発熱もなく発疹も軽症ですが、年長児や成人では発疹とともに発熱し、関節痛を訴えることが多く、症状も強い傾向があります。発熱は一般的に軽度で、2～3日で解熱します。斑状丘疹状の発疹が発熱と同時に顔から始まり、頸、身体、手足へと全身に広がります。頸部、耳介後部のリンパ腺が腫れます。リンパ節は発疹の出現する数日前より腫れはじめ、発疹が消えてから1～2週間、長ければ数週間持続します。

治療と看護

症状に応じて、飲み薬で対症療法を行います。かゆみに対して軟膏は使いません。食事は普通で構いませんが、熱のある時は水分を多めにとらせて下さい。

隔離期間

発疹が消失するまでの3日間

合併症

- ①**血小板減少性紫斑病**：発疹出現後4日目頃に出現しやすいと言われています。鼻血が止まらなかつたり、紫斑（圧迫しても消えない出血斑）が出現した場合は、直ぐに病院を受診して下さい。
- ②**関節炎**：思春期以降の女子に多く、指の関節、次いで手首や膝に出現します。
- ③**髄膜炎**：発疹出現後、平均 3.5 日に突然痙攣の重積で発症する事が多く、意識障害、歩行障害などの症状が現れた場合は、直ちに受診して下さい。

確定診断

風疹の診断は症状のみでは不確実です。少なくとも女性では抗体検査(風疹 HI)を行い、確定診断をすべきとされています。

予防法

風疹ワクチンを12～90ヵ月の間に個別接種で行います。1995年に予防接種法が改正され、中学生女子に対する集団接種から個別接種へと変更されました。その結果、接種率が著減しており、妊娠可能年齢の女性での風疹抗体保有率の低下が指摘され、将来における先天性風疹症候群の増加が危惧されています。

※先天性風疹症候群: 風疹に妊娠16週、特に14週までの妊婦がかかると、難聴、白内障、先天性心疾患などの症状を有する異常児が生まれる可能性が高くなります。したがって妊娠前に風疹にかかっているか、あるいは風疹ワクチンの接種をしていないお母さんは、妊娠前に予防接種を受けておきましょう。

(2002.8)